

我が研究生生活

—平安朝研究四十五年(二)—

山中 裕

先回の「我が研究生生活」(一)(本誌八七号に掲載)につづいて、それ以後(昭和三十五年頃)の私の公私における仕事および研究の実態をつづりながら、とくに今回は研究論文について詳細してみようとおもう。

前回にも述べたように、私は昭和二十年四月に東京大学史料編纂所に入所。古文書部相田二郎先生のもとに入った。第二次世界大戦の真只中で、史料編纂所も空襲を避け、貴重な史料とともに家族ぐるみで信州の伊那と上田に疎開している人々が多かったときである。この辺の事情については前に詳細したため、今回は省略する。

戦後、すなわち、昭和二十一年に平安時代の室、二編に移り、西岡虎之助・桃裕行両氏のもとで二年半、二編の仕事に携った。このとき、紫式部の伝記史料をやらせてもらったのはまったく嬉しき限りであった。そして昭和二十三年、新しく発足する古記録部に桃氏とともに移った。古記録部は昭和十八年に始まっていたのであるが、本当の出版に向けて進んだのは、この時からであると言つてよからう。古記録部は、戦後はいじめの出版である。当時の古記録部の部長は森末義彰氏で、その当時の史料編纂所は、まだ研究所となつておらず、文学部の所属研究所であり、史料編纂官、同官補、嘱託、雇というような肩書きであった。嘱託

は、まもなく教官待遇の文部事務官とよばれるようになった。昭和二十六年、史料編纂所は東大の直属の研究所となり、ここに東大教授、助教、助手という分け方になったのである。ただ、教授、助教の定員はまったく少なく、助手、文部事務官の数が頗る多く、文部事務官より助手(文部教官)となり、助教になるには、先ず入所後、二十二、三年かかるのが普通だった。私の例を言えば、文部事務官から、助手に任官したのが三十一歳、助教は四十五歳だった。それが特に遅れたと言うのではなく、順調な進み方であったのである。従つて私より先輩の人々では教授時代十五年というその規定に足りない方々が多く、私も十四年という教授年数のため名誉教授になつていない。そして我々が教授になり教授会に発言するようになって、このことを強く主張、現在は早く助教・教授になるため大部分の人は名誉教授となっている。また、私の周辺の人でも所長に就任の人は十五年に満たなくとも名誉教授になり得るという特権があった。

さて、話をもう一度、昭和二十三年にもどそう。森末氏は『大日本古記録』との出版計画を岩波書店と契約された人でもあり、また、近衛通隆氏がこの頃、入所したため、陽明文庫所蔵の文献、即ち、代々の関白記を、先づ道長の『御堂関白記』をはじめとして出版したいという希望も出せるに至つた。そして、陽明文庫との契約も出来て『御堂関白記』の出版の計画が早速に始まつたのである。そこで、桃氏の指導の下に『御堂関白記』の校訂と註づけを二十四年から始め、二十六年度に出版するというのを岩波書店に森末氏が約束した。私は入所以来、まだ十年経つておらぬうちに、『御堂関白記』が与えられたことは大へんな喜びであ

ったが、と同時に、こんな大きな仕事を桃氏の指揮の下には見え、かかえることに一抹の不安も感じた。まもなく陽明文庫へ『御堂閔白記』の自筆原本を拝観に行くこととなったのである。いままで『御堂閔白記』は、『日本古典全集』に上下二冊で出版されており、私達学生の頃は、もちろん、これで勉強したのだが、底本に陽明文庫本は使用されておらず、即ち、その出版のときは自筆原本を拝観することが出来なかつたのである。従つて、『日本古典全集』では江戸時代の新写本の宮内庁書陵部本、および内閣文庫本などを底本・校合本にして、これを完成させていたのである。そのため日本を古典全集の『御堂』は大へんに読みづらかつた（これは『日本古典全集』がよくないと言うのではなく、底本が新写本ということによるものだった）。ここに、道長自筆本の具注暦に書かれてある巻物の御堂閔白記を底本にしての作業にかかつたことは、まったく感激の連続だった。昭和二十六年の春、陽明文庫へ出張し、初めて具注暦の『御堂閔白記』を拝観したときは、体もふるえるばかりの感動をうけたのである。しかも、想像していたよりも、その原本があまりにもいたみがなく、よく修理保存されていることだった。これが果たして千年も前のものかと一瞬、疑いたくなるように立派だつたことが、また、もう一つ、私を驚嘆させた。桃氏とこうして陽明文庫へ出張したのは昭和二十六年であつたが、これより先、桃氏は花田雄吉氏とともに一年前に陽明文庫に一般的文献の調査のため出張している。陽明文庫には、それ以降、現在に至つても度々拝観に、また、その他のことで参つてはいるが、とにかく戦時中の近衛内閣の総理大臣文麿氏は、文化財についての関心が深く、そのおかげで、『御堂閔白記』をはじめ、多くの文化財を、よく

修理し保存状態も完全にして現在までのこすことが出来たとのことである。

さて、「大日本古記録」「御堂閔白記」のはじめての出版には大変な苦勞をしたものだった。史料編纂所としても、古記録としての出版は始めてのものであつたから、森末氏は岩波書店との多くの規定方針を決めるのに大変であつた。そこで、先ず、原本に現れる異体字をどうするかなども大いなる問題だつた。例えば、古体、異体、略体文字をどの程度、そのまま使用するかを桃氏と検討を始めた。それは、大日本古記録の『御堂閔白記』の例言に、一つ一つの字を例を挙げて詳細したため、ここには詳細は省くが、現在でも用いている略体文字で底本の文字と合致するものはなるべく利用した。それらの文字のうち正字に改めたものについても、一つ一つ例を挙げて説明をしたが、底本の字が、いかにも特殊なものが多かつた。また、『御堂閔白記』には、道長の大らかな性格によるところからくるものであろうか、誤字、脱字、宛字が大へんに多い。それらも原本のかたちを出来るかぎり伝えようとする意図から誤字は誤字のままにし、傍註を加えることとした。また、脱字は註を付し、宛字は正字を側に傍註し「参^大太内」のごとく、校訂注として上げた。また、もとの字の上に重ねて正字を書き道長自身が改めている場合も、可能なかぎり元の字を示すようにした。例えば、「即^(x参)参内」とある様に、これははじめ「参る」と書き、道長自身がそれを上に重ねて「即ち」と訂正したことを意味するものである。この際も一字一字をよく検討し、読める限り元の字を生かし、原本のていさいをのこしたものである。

こまかい検討のことに関しては、まだく書かねばならぬことは多い

が、『御堂関白記』は戦後、古記録部の最初の出版である、校訂、その他、すべてこの『御堂関白記』のやり方にしたがって、その後の『大日本古記録』の出版は進んでいった。古記録部は第一部と二部とに分かれており、一部は古代、平安末期まで、二部が中世以降であって人員は、はじめ七名であった。『御堂関白記』は、ともかく上中下三冊を三年連続で出版し、三年目の下巻には年表と索引を付けねばならず、三年目の出版は、昭和二十八年で二十九年の三月までに完成せねばならなかった。このときは遅れがちで最後に古記録部以外の人々の応援も頼まねばならぬこともあり、本当に苦労したことは、いまも忘れられない。「御堂地獄」などと誰いうともなしに噂が立ったのもこのときである。

さて、これははじめとして、次々と出版が完成した。第一部では『貞信公記』『九曆』『後二条師通記』等が引きつづき完成していった。この辺の事情については前号で詳細したため、簡単に述べることとするが、その頃より、古記録部は、一応、一人が一つの古記録を責任をもって完成するという風なことが決まった。即ち、森末氏から川先庸之氏に部長が、かわったときである。そこで桃氏が『貞信公記』を、私が『九曆』を担当した。『九曆』は、『九曆抄』『九條殿記』（別記部類記）、『九曆記』（『貞信公教命』）、『九曆断簡』『九曆逸文』の五つの部分にわかれ、『九條殿記』は師輔自身が行事別に編年体に行事の内容を部類したものである。また、『九曆記』は、貞信公忠平が師輔に教命したものであって、「仰云……」と始まる忠平の息子師輔への教を「仰せて云わく」と師輔に教命したものである。さらに逸文は多くの文献から『九曆』を引用してある部分を取りあげたもので『九曆』として編年体に並べたものであつて

『西宮記』をはじめ、『北山抄』・『江家次第』等の多くの儀式書をはじめとして、『小右記』『雑記』その他の日記類に引用されているものの逸文を蒐集するのが非常に大へんな作業であった。これを大体、一人が責任をもって仕上げるのは、まことに神わざであった。しかし、この『九曆』のために、私は一生懸命になってやったときの想い出は忘れられない。但し『九曆』の時は、まだ身分は助手であったため、川崎、桃の両氏が、私の作成した原稿も校正もくわしく丁寧に見て下さったことは、いうまでもなく、このようにして『九曆』は私が責任をもってまかされたといえ、先輩お二人のあたたかい指導の下によって完成したものである。

こうして、私は古記録部で一応、『御堂関白記』と『九曆』を担当したが、つづいて『小右記』の出版が始まった（昭和三十三年）。第一冊目は桃氏の手をつけられ、私がお手伝いをするというかたちで始めたが、第一冊目が終るか終らぬうちに、すでに私が二冊目にかゝり、二冊目は、私が原稿を作り始めた。『小右記』は『御堂関白記』のように原本も存在せず、古写本、新写本をもとに、これを底本としたが、古写本、前田家本、九条家本、伏見宮家本等も、なかなか読むのに相当に苦労した。史料大成は伏見宮本を底本としており、さらに、それ以前の史料通覧は、新写本の内閣文庫を底本としていた。伏見宮本は古写本とは言え、あまりよい写本ではなく、原本の面影をどの程度のこしているかは、甚だ疑問であった。ここに前田家尊敬閣本を底本に使用出来ることとなったのは何よりの好都合であった。しかし、その頃、正直いって『御堂関白記』や『小右記』のように、これらの古記録類を取組んで卒論を書こうという人は、私の周辺を見ても誰もいなかったといつても過言でない。また、

大学の講義でも、古記録中心のものはあまりなかった。しかし、わたしは、『栄花物語』・『大鏡』がきわめて、学生時代から好きで読んでおり、これには和田英松先生の立派な『栄華物語詳解』があつたことを説明せねばならない。この『栄華物語詳解』については、当時、国史学会はもちろんのこと、国文学会でもあまり読んでいる人もなく、現在もほとんど手に入れることの出来ない書物であるから、少しばかりこれについて述べておきたい。和田先生によるきわめてしつかりした本文の校訂であり、さらに加えるに、これには詳しい注釈がある。私は和田先生の『栄華物語詳解』というのは、現在でも、これにまさるものはないといつてもよいというもののおもう。例えば、現在、和田先生の『建武年中行事注解』が講談社文庫から出版されている。(所功氏校訂)。これは、読まれた方々も多かるうが、本文のほかに年中行事儀式に関する多くの書物、例えば『西宮記』『北山抄』『江家次第』をはじめとして古記録、いわゆる日記類が非常に多く引用されており、その注釈がまた、大へん高度なもので、私には、まったくためになり、その『建武年中行事』(明治書院)とともに『栄華物語詳解』(明治書院)を座右の書として私は楽しんで読んでいった。『栄華物語詳解』は、私の大学院の学生時代、国史・国文両面の研究を総合したすぐれたものという印象をつよく與えられ、将来、このような両分野を総合したような研究を、私はやりたいとこれを読んではずきりと思つたのである。そして学生・院生時代に『栄華物語詳解』を読み、藤原道長の研究をやり始めたのである。もちろん、栄花物語も大鏡も当時、国史大系、史籍集覧をはじめ、岩波文庫にもあつた。しかし、これらに私は本当に強い刺激をうけたのは、この『栄華物

語詳解』のおかげである。このころ、『御堂関白記』も『栄花物語』も立派な定本もまだ充分なものが存しない段階で、摂関政治、とくに道長を研究していこうなどと考えたことは無謀であるといわれても仕方がなからう。

しかし、そのような私にも拘らず、坂本太郎先生は、こまかく指導して下さつて卒論提出の結果についても、また、大学院においても詳しく御批判と御指導を賜わつた。

さて、史料編纂所についての話をもちそう。こうして、『御堂関白記』『九曆』『小右記』と進んできた仕事は、大部『小右記』に入つて、これはかなり長くつづくという見通しで進めていった。昭和四十年には、私も助教授となり、(その当時、助教授は室長、教授は部長という)桃氏は編年部の部長となられて長年、研鑽を積まれた古記録部から編年部へ移られた。そして古記録第一部には、龍福義友氏が大学院を経て入つて来られた。その後、私も編年部へ移り(昭和四十二年、後述する)、龍福氏が、ほとんど一人で、その後、『小右記』(大日本古記録十一冊)を仕上げているのである。

さて、この辺で、私の研究生活について少し、くわしく考えよう。前号にも少しばかり述べたところであるが、私の指導教官は坂本太郎先生であつた。坂本教授のもとで大学院では年中行事、儀式を勉強し、「白馬節会」を書き、それは昭和二十六年に雑誌『日本歴史』に、これは大学院の論文に手を加えて所載したもので私の処女作である。と同時に大学院在学中のころから、私は国文学方面に深い関心をもつており、卒業論

盛になってきたときであったので、せめて夜ぐらひは自分の研究を続けたいと嘆いたことも少なくなつた。しかし、そのような生意気な気持をおこしたのも今になってみるとよく反省している。こういう基礎的な仕事をじっくりと仕事としてやったことが、もたになつて研究がある程度完成したのであると、しみじみ有難く思っている。そのころ、史料編纂所のなかでは、もちろん今でもそうだが、学術雑誌の編集委員をされている人が多く、先輩の故岡田幸雄氏は「歴史地理」の編修をされていた。時々、私の古記録室へ来られて、私に「山中さん日本歴史のみに書いてないで歴史地理にも原稿をもつていらつしやい」などと励ましの言葉を言われた。それが昭和三十二年の「栄花物語の道長」（歴史地理）であつた。この頃より道長の伝記研究に取組み、その他の人々の伝記をまとめ始めたのである。それらを集成して昭和四十九年『平安人物志』（東大出版会）としてまとめた。

この間、史料編纂所古記録の日記を仕事としてやっているからには、いづれ日記についてまとめてみたいという考えをもつていた。そのはじめは、「国文学解釈と鑑賞」の「日記 特輯号であつた。ここに「漢文日記について」という題で依頼され、平安朝の古記録、『御堂関白記』を中心にまとめた。その頃、山川出版社から「日本史の研究」に「平安時代の公卿の日記」を笠原一夫氏から依頼されまとめたのも此ころである。古記録に関しての情熱は、私にとつて昭和三十年前後に高まり、「国史学」に「九暦および九条年中行事」をまとめたのも此頃のことであつた。（昭三十二）『平安期の古記録と貴族文化』（昭六十一年に所収）
こうしているうちに、どうやら自分の研究にもある程度方向が決ま

つてきたのである。一応、この当時の自分の研究の道を整理してみると、先ず、大きなところの焦点として摂関政治を中心とする道長とその周辺に関するものである。と同時に、日記、古記録と儀式、源氏物語、歴史物語等のそのものの研究である。『西宮記』を真剣に読み始めたのも此頃であつた。

そして昭和三十一年、川崎庸之氏編『藤原道長をめぐつて』（『日本人物史大系』）を依頼されたときは本当に嬉しく、一応、わたしの道長研究の基礎を、ここにおくことが出来たと見えよう。『御堂関白記』・『小右記』・『雑記』等を本当に内容に徹して読まねばという覚悟のようなものを自分の心に決めた。

さらに同年、川崎庸之・井上光貞氏の編による『日本文化史大系』（小学館）があり、その「年中行事」について書くようにと言われた。川崎・井上の両氏が、私がこのころ、本当に儀式・年中行事等をしつかりやろうと考えているということをつかかって下さつたのであろう。これは、また、私にとつて何よりの好都合、嬉しいものであつた。これに向つて半年ぐらいかかつて私は儀式・年中行事に関する資料整理を行なつたのである。

このような状況にあるとき、即ち、人物の伝記などについて資料蒐集を行なつていくとき、道長のほかに、敦康親王・敦明親王（小一条院）、大江匡房、藤原兼家等々をまとめた。これは、後に『平安人物志』（昭和四十九年、東大出版会）に集録したのである。

一方、歴史物語、とくに、『栄花物語』の研究には、昭和三十年代に本腰を入れてやり始めた。『六国史』・『新国史』につづく、いわゆる史学史

文の題名は『藤原道長』であったことは前述のとおりであった。『御堂関白記』・『小右記』・『栄花物語』・『大鏡』などを用いて書き上げたものであるが、いまから見るとまことに恥かしいものである。また、『御堂関白記』といえども活字本は『日本古典全集』のみであり、これを懸命になつて読み、史料としても、かなり利用したものであったが、こんな大胆なことをよくやったものとおもう。また、『小右記』といえども『史料大成』のみであり、本当に苦労したものである。

さて、私の卒業は昭和十八年九月だった。(その当時、卒業は九月だった)。この年の十二月一日が学徒動員であり、その後は一応、大学の中は講義も有つて亡きがごとくであった。私たち十八年九月の卒業が、普通の卒業の最後といえよう。十九・二十年の大学は、大げさにいえばみな、軍隊に行き、文学部国史学科の卒業生は、病身で軍隊に行かない人たちばかりということになった。そのような環境のなかで一緒に卒業し、現在も学会で活躍をつづけている人は佐藤昌介氏(洋学史の研究者、東北大学名誉教授)である。氏は着実に研究を進め、この方面の研究の権威である。

さて、こうして摂関政治、藤原道長等の研究をはじめ儀式、年中行事にも関心が深くなつてきた私は、国文学方面の研究に於て、池田亀鑑先生に、学生時代からお世話になつていた、『栄花物語』の研究とともに私は、『源氏物語』を史料として読んでいたのである。摂関時代、とくに藤原道長の娘彰子(一條天皇の中宮)に宮仕えした紫式部は、どのような生活環境の中で、『源氏物語』を書いて行つたか。そのような問題から入つていったところ、私にとつて、この方面の最初の研究は『源氏物語の

成立に関する一考察(国語と国文学)であった(のちに『歴史物語成立序説』に所収)。このような文学作品を歴史の史料として用いるということだが、これは本当に慎重にやらねばならぬことは言うまでもないことだが、同時に文学作品そのものの価値を、当時の社会、生活のなかに、このような美しいみやびな作品がどうして生まれできたかとの問題のなかにとらえようという試みを多く私はもつてきたのである。それには、『源氏物語』とともに、その当時の歴史を、藤原氏の人々の生活を道長中心に書いていく。『栄花物語』を、どうしても、自分はやりたいという強い衝動にかられたのである。だが、『栄花物語』は、単に『源氏物語』の影響のみで生まれた作品ではない。『六国史』・『新国史』の終つた時代、すなわち、宇多・村上天皇から『栄花物語』が始まっているということは、これは、藤原氏中心の歴史を、六国史・新国史時代につづけて叙述しようとする意図があつたことも注目せねばならぬとおもひ、私にとつてこれから歴史物語は絶対の研究となつてきたのである。そのころ書いたものは昭和二十七年・二十八年に『栄花物語の歴史性と文学性(日本歴史)』・『栄花物語の史書としての価値(日本歴史)』・『栄花物語における源氏物語の影響(国語と国文学)』・『光源氏と藤原道長(日本歴史昭二十九年)』等々である。その後の『源氏物語』・『栄花物語』に関するものを集めて、また、未発表も加えて完成したのが、単行本、『歴史物語成立序説』(昭三十七年、東京大学出版会)である。

さて、一方、史料編纂所では、各室での出版が非常に多忙になり、時には自宅へ持つて帰り夜中まで仕事をしたことも少なくなつた(とくに『御堂関白記』・『九曆』出版のとき)。丁度、自分としては研究欲が旺

の研究の上からの歴史物語の成立という問題に本格的に取り組み始めたのである。即ち、『栄花物語』という作品は、否、文献は、『六国史』・『新国史』の編纂がとまっていた後に、生まれるべくして生まれたのであるということ、『六国史』の後の『新国史』（統三代実録）との連関を中心の問題としてまとめて行こうとしたものである。それは、国学院大学の国史学科で講演し、『国史学』に「歴史物語の成立」（昭三十五年）として発表した。同じく、その翌年、『栄花物語における安和の変』（日本歴史）を執筆した。なお、年中行事について「嵯峨天皇と年中行事」（歴史地理）を発表したのも昭和三十五年である。

そして、昭和三十七年、東大出版会より単行本、『歴史物語成立序説』を完成した。初めての単行本である。序文に坂本先生の御言葉をいただき光栄であった。これは、今までの栄花物語に関する論文を主とし、新たに書きおろしの論文を加え、源氏物語の論文を先に置き、『源氏物語』から『栄花物語』への成立を文学史・史学史の両面の立場で、『六国史』・『新国史』との関連についてものべたものであった。

同じく昭和三十七年、坂本先生の企画によって、その頃、至文堂に「日本歴史新書」というものがあつた。すでに五十冊ぐらいのものが計画されたり、また、半分ぐらいは完成されていたが、『平安時代の女流作家』を、私も依頼されたのである。これは書きおろしであるが、今まで行なってきた『源氏物語』を中心に、『蜻蛉日記』、『紫式部日記』などにもふれつつ、摂関政治の中に、藤原氏発展の中に、女流作家たちは、いかに生きてきたか、そして、このような素晴らしい作品が、どのような環境のもとに完成したかを述べたものである。即ち、それらの作品の歴史的

背景を検討しつつ、『源氏物語』と紫式部について、その作品と作者の連関を歴史的背景から取扱ったものである。

なお、この年、岩波書店の日本古典文学大系の『栄花物語』上下二冊（昭和三十九年、四十年発行）の刊行と注釈をすることが決まった。しかも国文学会で『栄花物語』の研究を一すじにやって来られた先輩、松村博司と二人でやることとなり、松村氏が国文学的な注釈を、私が歴史的な面を担当することになり、これは、『御堂関白記』・『小右記』等、古記録との検討をすることが主に、私の仕事であり、私にとっては歴史物語と古記録の基礎的研究をまとめるのに、まったくよい機会であった。昼間は史料編纂所の仕事がいそがしく、夜帰宅してから、こつこつと毎日、『栄花物語』の歴史的の面に注を付ける。しかし、この仕事は大へんだったが、私にとって、まったく面白かった。

同じく、こうして、『栄花物語』の校訂と註をつけながら、かたわら、『栄花物語月宴巻について』（国語と国文学）の論文を書いた。また、この年、金澤文庫にある『金澤文庫本栄花物語』について、調査研究をし、『金澤文庫研究』に、『栄花物語と金澤文庫』・『金澤文庫本栄花物語目録について』等々の論文をまとめた。

一方、史料編纂所では『大日本古記録』の『小右記』の仕事を毎日しつづけ、充実した毎日を送っていたのである。昭和三十九年、こういう中で、『栄花物語』（日本古典文学大系）の上巻が完成したのである。

以上、昭和四十年までの公私にわたる私の仕事についてまとめあげてみたところである。これ以降については、次の機会にまた、まとめることとしたい。